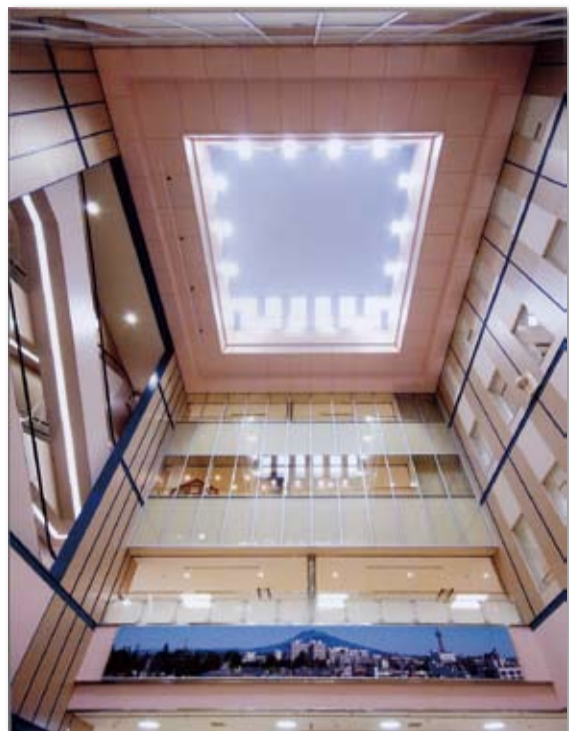


2008年(平成20年)6月25日



◀新外来診療棟外観



▶3階中央待合ホール

▼花田病院長挨拶

▼3階プレイコーナー



▼感謝状贈呈



▼施設見学の様子



病院長の一言

～外来診療棟竣工記念式典を
振りかえって～

弘前大学医学部
附属病院長 花田勝美



本年5月30日、附属病院の新外来診療棟竣工を記念して、医学部コミュニケーションセンター(MCC)にて、竣工記念式典・竣工祝賀会が執り行なわれました。式典にはご来賓として、文部科学省から三浦公嗣高等教育局医学教育課長にお出でいただき、さらに、4名の国会議員、三村青森県知事、相馬弘前市長、医療機関・業界の代表者、本学からは遠藤学長、小川理事を始めとして各診療科の先生、看護師さん等68名のご参加を賜りました。ご来賓いただいた方々はいずれも多忙を極める方ばかりであり、ご臨席に感謝申し上げるとともに、主催者側としては身の引き締まる思いでした。竣工式典では単に30年来の附属病院の夢がかなったということに留まらず、逆に各界からも附属病院へ大きな期待と希望も寄せられていることを悟りました。竣工が昨年9月なのに「なぜ今頃記念式典なのか？」という疑問も寄せられました。それは、旧棟から新棟への引越し業務が各診療科、事務部を合わせ実に膨大な量であり、初めての経験でした。年末・年始にかけた作業は厳寒のなかで行われましたが、この時期を選んだのは、できるだけ診療を休まず患者さんに

不自由をかけない一策でもありました。そのような訳で気候のよい5月に開催させていただきました。各界からの代表者の祝辞と、懇親の場からの提言をまとめると以下ようになります。附属病院は、青森医学専門学校創設から64年、弘前大学医学部附属病院として59年の長い歴史を有します。津軽医療圏はもとより青森県全体を越えて近接する他県の医療圏の中核病院として、その重責を担ってきました。この附属病院で学んだ医師は全国津々浦々の中核となって活躍されています。附属病院の再開発事業は、

昭和63年度の第一病棟、平成4年度の第二病棟、平成7年度のエネルギーセンター、平成11年度の中央診療棟に続く事業として計画され、ようやく関係者の努力が実を結びました。旧外来棟からの引越しは、「暗さ」、「狭隘さ」、「汚さ」の3Kから脱したことになり、新たな診療と教育への意欲が湧いてきます。ホッとしている間もなく、私たちに求められているものを改めて考えなければなりません。特定機能病院として、高度な医療の提供と開発、次世代への教育に活用することは当然ですが、何より地域から

も求められているのは若き研修医の定着、地域循環型の専門医養成であり、附属病院の新外来診療棟はその「拠点」にしなければなりません。なぜなら、どう引き算しても附属病院ほど、教育スタッフに恵まれ、臨床も研究も一体として勉強できる場所はないからです。附属病院の開発はこれに止まりません。高度救命救急センターの設置、駐車場の整備などの実現に向けて共に頑張ってゆきたいと思えます。こうした努力が、地域医療の再建と活性化に繋がるとを信じて。
(平成20年6月8日記)

加速する医療プロセスの多様化や複雑化、さらに医療法、診療報酬制度の目まぐるしい改訂などにより、医療技術職員の担当する領域は飛躍的に拡大し、新たな診療業務分担とともに医療安全、感染制御、栄養管理(NST)、治験管理、医薬品管理、医療機器管理などへの参画も求められています。このような中で、本院における人材の確保に陰りが生じているように思えてなりません。担当する検査部の現況を記してみます。一昨年本学保健学科卒業2年目の技師が地元ではない遠方の総合病院に転職したのに引き続

き、昨年は新卒者が1年を待たずにはやはり同様に転職しています。結婚や出産、伴侶の転勤など通常ある理由以外での雇用期間内の離職は、立場上気になるところです。また、人事の窓口をお願いしている保健学科教員から、一部の学生を除いては本院を就職先として希望していないという数年前からの言葉も耳にこびりついています。聞いた当初は、志の高い学生がいればと高を括っていましたが、厳しい現実を目の当たりにするとこの言葉のインパクトを実感します。着任時驚いたことの第一は、非常勤医療技術職員(現在正確には

先憂後楽

医療技術職員の 空洞化



副病院長 保嶋 実

契約職員)の3年雇用の問題で、未だに根本的な解決には至っていません。3年経つと自動的に退職(平成19年4月からは、2年延長が条件付きで可能)する雇用条件の下では、士気を保たせるどころか、士気を求めるのが憚られるような心境で、魅力ある職場を目指し、そして医療チームの一員として誇りを持てるように指導に努めてきましたが、限界があります。経費対効率の問題や人的資源の配分などについての議論も当然です。しかし、国家資格を有する医療技術職員の需要は増えることはあっても減ることはないとの認識

の下、契約職員を妥当な評価に基づき、必要とされる人材に対しては雇用期間を超えて更新できる制度の整備が先決で、人材確保の前提となるべきものです。次代を担う有為な人材の確保を単なる人件費の多寡のみの議論に矮小化することは、本院の将来に禍根を残すことにならないでしょうか。医療における医師の負担軽減そして多様化する医療のニーズなど、医療の変容に対応する人的資源活用という視点での判断が当に求められているように考えています。

各診療科の紹介

【集中治療部】

当部は廣田部長のもと正式医師職員3名、看護師28名で運営しています。医師は麻酔科、救急部から多くの方の参加を仰ぎ、また看護師の方は救急部・血液浄化療法室が兼任となっています。24時間体制をとっているため、医師は当直に麻酔科の支援を仰ぎ、また看護師は3交代で常に患者様の治療に切れ目が無いようにしています。人員が足りず、人手を要する作業のときは、主治医の先生方や学生さんの援助を仰いでおります。また臨床工学士のボランティア活動に支えられております。



御存知のように、ICUは重症患者様を一番危機的な状況のときにお世話をし、回復をはかる場とされています。入室患者様の数は年々増加しており、昨年の入室患者様数は619名で利用率はほとんどの月で100%を超えております。術後管理患者様が多く、62%を占めており、手術以外の入室理由で

は、心不全、呼吸不全の患者様が多くなっています。院内のみでなく、広く他病院からの患者様にも利用していただいております。津軽一円および秋田県北部が主な圏内となっております。

病床は8床で、小さなICUですが、大体旧国立大学附属病院での標準的な病床数となっています。3年前に2床増床となっておりますが、8床ではなかなか患者様の需要の増減に対処が困難なことがあります。学会シーズンには患者様が減り、冬場の天候が悪くなる

と患者様があふれて入室できないということがあります。

当ICUは、ICU専従医が治療を行ういわゆるクローズド制をとっており、これがICUでの救命率などにより影響を与えているものと思います。多数の科の方に使用していただく場所であり、その時点での病院の方針、利用科の方針、患者様疾病動向などにより使用状況が刻々かわります。ICUを上手にご使用ください。

(集中治療部副部長 坪 敏仁)

ひろだい保育園開園式開催

弘前大学内保育園(ひろだい保育園)が4月に病院敷地内に開園し、開園式が4月4日同園内で開催された。

開園式では、はじめに遠藤学長から「待ちに待った開園です。園児と同じようにこの保育園も育てていきたい」また、花田病院長から「若い医師、研究者たちにうまく活用してもらいたい。また、利用者にとって安全安心な保育園を目指したい」と挨拶があった。

その後、看板上掲を行うとともに、明るく開放的な園内の施設を見学し、今後の活動に大きな期待を寄せていた。保育園は、大学職員、大学院生のための「子育てと仕事」、「子育てと学業」といった両立支援策のひとつとして設置された。床面積330㎡、屋外遊技場100㎡の平屋建てで、保育室のほか



給食室、沐浴室などを備える。利用できるのは学内の全職員で、定員に空きがある場合は大学院生も利用可能。月極の常時保育、一時保育合わせて40人の園児を受入可能で、現在26人が利用を申し込んでいる。

(総務課)

平成19年度 ベスト研修医賞選考会開催

卒後臨床研修センター長 加藤博之

平成19年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、2月29日18時より医学部コミュニケーションセンターで開催された。本賞は平成16年度からの卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回が4回目である。当日は、平成19年度に本院で研修を行なった岡田有史先生、斉藤淳一先生、藤田和歌子先生、綿貫裕先生(以上一年次)、小田桐元先生(二年次)(年次別五十音順)の5名の研修医が、「研修生活を振り返って一気づいたこと・伝えたいこと」と題して、7分間ずつスピーチを行なった。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した52名の学生諸君(5年生が中心)による投票が行なわれ、藤田和歌子先生がベスト研修医に選ばれた。引き続き表彰式が行われ、藤田先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、次点となった岡田有史、斉藤淳一両先生(両者同数票)には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られた。その他にも各

種特別賞として、綿貫先生に「グッドパートナー賞」、藤田先生に「レポート大賞」、小田桐先生に「ナイスサンタクロース賞」、斉藤先生に「アグレッシブ賞」、岡田先生に「クイックレスポンス賞」が贈られた。つづいて懇親会に移ったが、5年生からも「ベスト指導医賞」、「ベスト6年生賞」等の発表があり、教職員も多数参加し盛会裏に終了した。本賞は単に研修医のモチベーション向上のために貢献しているだけでなく、研修生活・臨床実習を通じて、研修医-学生間で学びあい、教えあう「屋根瓦方式」教育の促進に役立っていることが伺われる。



▲花田病院長よりベスト研修医賞を贈呈される藤田和歌子先生

看護週間によせて

今年も、5月12日ナイチンゲールの誕生日を中心に一週間、日本中で看護週間の行事が開催されました。当看護部では、毎年、看護部職員で構成される看護部自治会の取り組みとして、「看護の日のお花」を展示しています。今年は、新しくなった外来診療棟の中央待合ホールに、2メートルほどの高さがあるドウダンツツジと、ピンクや赤のカーネーションやあじさい、ミリオンバンブーなどが飾られました。吹き抜けの待合ホールに椅子に座りながら観賞したり、足を止めて観賞された方も例年より多かったようでした。

書きをしていることに驚いていた患者さまや、「忙しいのにありがとう」と感謝の言葉をかけて下さったり、「思い出になるわ」と喜んで下さった患者さまもいらっしゃいました。患者さまから笑顔や励ましの言葉を頂き、看護の喜びを感じた一日でした。これからも、思いやりと笑顔を忘れず看護スタッフ一丸となって頑張っていきます。

(第二病棟2階 大高奈奈子)



▲看護の日のお花

新しい放射線診療装置の導入

放射線科・放射線部 阿部由直

新しい放射線診療装置が附属病院に導入されました。64列デュアルソースCT(64列CT)、PET-CT、CT付き血管撮影装置、SPECT-CTです。

64列CTでは、高速で多断面CTが撮影できますので、冠動脈撮影が可能です。その性能は予想以上に優れており、処理時間も非常に短いので、診療面での有益性が向上しています。

PET-CTは、岩手県の製造工場から購入することでサイクロトロンなしの稼働です。大切なことは、青森県唯一の特定機能病院かつ津軽地域のがん診療連携拠点病院である大学病院としてPET-CTは必要不可欠な装置であることです。このことは年間約1200から1400

名のがん患者さんが来院する大学病院としてのニーズに応えられることです。当院のPET-CTの特徴は、癌の病期診断のみならず放射線治療と直結しています。さらにPETの呼吸同期装置と治療用の呼吸同期装置と連動させることで、より正確な診断と治療ができます。このことによりがん診療に多大な貢献が期待できます。

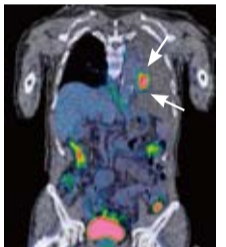
新しい血管撮影装置は、フラットパネルを検出器とした装置で、同時二方向からの透視・撮影のほかCT像も作成できます。またSPECT-CTもX線による吸収補正とCTを撮影



▲冠動脈CTと画像処理を行ったデータ

することができるので、新しい診断法の確立が期待されます。

これらの新装置の導入は診療だけでなく教育と研究に多大な貢献をするものと考えます。最後になりましたが、これらの装置を導入するにあたり貢献いただいた関係各位に心よりお礼申し上げます。



▲右上の矢印のところが肺がん

平成20年度 院内コンサート開催

本院では、患者サービスの一環として院内コンサートを実施しています。3月、4月及び5月の3回、いずれも午後6時45分から外来待合ホールで開かれました。

3月6日は、70年代の懐かしいフォークメロデーをおりませながら、息のあったハーモニーと抜群の歌唱力で癒し系の歌声を聴かせてくれた、忠犬八公の故郷大館市を拠点に活動しているフォークデュオ「ダックスムーン」によるコンサートが開催されました。

4月28日は「春の歌」をテーマにバス・熊木晟二、アルト・猿賀智美、ピアノ・熊木美紀子の御三方の出演により開催されました。

また、5月30日は「医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル」により「初夏の院内コンサート」と題して外来診療棟竣工記念演奏会が開催されました。

いずれのコンサートも、吹き抜けの開放的な外来待合ホールに心地よい響きを残したコンサートとなりました。(医事課)



絵画寄贈による感謝状贈呈

本院では4月11日、弘前市の画家安井三佳子氏から、油彩画3点の寄贈を受け、花田病院長から感謝状を贈呈しました。

安井氏は国土社特選、県展奨励賞など多数の賞を受賞しており、「私の絵は心を癒すタイプなので、病院を訪れる人も和んでくれるとうれしい」と話しており、病院長は安井氏に感謝状を手渡し、「ど

こか懐かしい感じの作品ばかりで心が温まります」と謝辞を述べました。

寄贈された作品は、教え子を描いた「ひととき」(80号)、弘前公園の藤を描いた「藤棚」(80号)、店先で野菜を売る「小店のおばあちゃん」(100号)の3点で外来診療棟1階公衆電話設置場所の向かいに展示しております。(総務課)



▲絵画を寄贈した安井三佳子氏(中央)と花田病院長(左)と砂田看護部長(右)



▲感謝状贈呈後寄贈した絵画を鑑賞

【編集後記】

小雪舞う年明けに新外来棟へ引っ越しが行われて早くも半年が過ぎ、緑の濃い季節になりました。外来棟の竣工記念式典もつつがなく終了し、病院の歴史に新しいページが付け加えられました。まばゆいタイトルばりの新外来棟の西側には臨床研究棟の古色が目立つようになり、今年の8月には臨床研究棟の改装も始まります。それに伴い長年慣れ親しんだ古い外来棟も近い将来にはすっかり姿を消し、病院の玄関も全く新しい装いで彩られることと思います。「世の中にある人と栖(すまか)は久しくとどまりたるためしなし」とは方丈記の一節ですが、そうではなく未来に向かっての変貌は心浮き立つものがあります。長年慣れ親しんでいただいた南塘だよりの装丁も今号より新しい装いとなりました。本便りがこれからも病院の歴史の記録集となることを祈念しながら新装号をお届けいたします。

(広報委員長 水沼 英樹)